正村公宏・技法解説

【サイアノタイプと日本画の融合】

人間の動き数秒間をデジタルカメラの高速シャッターで撮影し、データをネガフィルム（OHPフィルム）に現像している。
OHPフィルムは通常ネガよりも大きく、白黒の白部分が透明になるフィルムである。
和紙にサイアノタイプ（青写真）で使用する薬剤を塗布する。
使用している和紙は、とても薄い八女紙（九州の手すき和紙）。
薬剤は紫外線で青に変色する。紙の上に現像したOHPフィルムを重ね、日光にさらす。
白部分は透明の為日光を通し、その部分だけ青く変色する。

定着させる像は、撮ったままではなくフォトショなどで加工したもの。
高速連射のうち、印象深いイメージ数枚を選択し、何枚も重ねわせることで残像表現によって動きの解体、再構築を一画面に納めている。

意図したイメージの為に、大変うすい八女紙を何枚も重ね組み合わせており、また薬剤の変色を想定して胡粉、墨といった日本画材を用いて一番奥の紙の画面の彩度、色相をコントロールし、表面の和紙の質を均質にする高度な技術が用いられている。

太陽光の強さや時間によって薬剤の変色具合は異なり、ひとつとして同じ色はない。
天候や季節、また紙のコンディションに合わせて意図した青を出すために試行錯誤が行われている。

作品にあらわれるグリッドのような縦横の直線はOHPフィルムの重なる部分である。この物理的制約である重なりを、画面のノイズではなく表現になるよう構成には気が使われている。

【作品のコンセプト】
　創作の出発点は人間を描きたい、モチーフにしたいという衝動があった。
人間の何気ない素振り、日常のふとした瞬間を描いていたが、そこを切り取っただけのアウトプットに対する強い違和感、不満足があった。
なぜ人間は、ふとした瞬間を描きたくなるのか。
学部時代の研究テーマとして取り扱った記憶と人間の存在の研究の中で、自身が関心があったのは脚色された「思い出」であるエピソード記憶ではなく、能動的には思い出せないが確かに知覚した短期記憶、「ある造形的に優れたものに対しての強い印象」としての記憶だったと結論付けた。
　ある一瞬、ある数秒間を描くために墨での残像表現、日本画に取り組み始めた。
人の美しい動きの瞬間は、美しいと感じても1つ1つは思い出せない。
その瞬間、残像を解体し、ひとつの画面に構成することで、能動的には思い出せない短期記憶のイメージを取り出し、脚色された、思い出としてではない、その人の存在というのを再現できるのではないかと考えた。
　しかし記憶としての人の動作の美しさ、は単純な人体の造形美だけではなく、それ以外の情報、場所や関係性といったものにも大きく依拠している。

そうした理由から、風景を写真でとらえ、その上に墨で人の動きを加えるという作品を作り始めた。また同時に、レイヤー構造ともいわれる記憶の構造を作品の形態にも体現させたいと考え、和紙や墨を何重にも重ねる構成をとるようになった。

本展での作品はさらに発展し、墨で描くことで発生してしまう作為、美しくしたいといった欲求や日本画としての整合性をとりたい気持ちを排除するために、完全なサイアノタイプ写真で画面を構成する作風に変化した。画面下には墨と胡粉で調整された和紙のレイヤーが幾重にも重ねられ、作品は二次元的にも三次元的にも記憶の構造を再現しようと試みられている。